

未上演作

「たった1人の。」

作・水上宏樹

登場人物

男1 先輩

男2 警備会社の司令補

男3 劇団の演出家

男4 隣の部屋の男

女1 自称制作の女

女2 ハーフの女

高校生の二人。ファーストフード店で話
らう二人。テーブルには注文したポテト
Mが置かれている。セミの鳴き声が響く
夏。

男1 イヨネスコ。

女1 知りません。

男1 アチョー。(女1に当たるか当たら
ないか寸止めで)

女1 ぐへ。(女1はくらったふり)

男1 モリエール。

女1 サリエール？

男1 アチョー。

女1 ぐへ。

男1 え、ベケットは？

女1 バケット？バケットはパンです。パ
ン。これはポテトです。ポテトのMです。

男1 アチョーアチョーアチョー

女1 ぐへぐへぐへ。

女1 俯く。

男1 ここらへんの作家はおさえといて。
高校演劇なめたらダメよ。ねえ、君さ、
もぐりでしょ、もぐりならもぐりらしく、
必死に勉強するの。

女1 すみません。先輩。

男1 高校演劇部のもぐりなんて聞いた
ことないよ。

女1 私の高校、演劇部ないんです。

男1 北高でしょ？不登校なんだよね、君。

女1 はポテト食べながら。

女1 友だちなんて一人もいなくて、いつ
も教室じゃ一人で、休み時間苦痛で、し
んどくて、辛くて、もう死にたくて。

男1 おいおいおい、そう投げやりになん
なつて、俺だつて一緒さ、親の転勤で青
森から東京越してきたのが高一の3学
期だよ。友だちなんていないさ、3年な
つてもいつも一人さ、だから演劇なんて
やってんじやん。

女1 学校サボってただただ道歩いてた
ら、この南高校まで辿り着いてたんです。
男1 北から南まで歩いて来た訳ね。それ

で演劇部の立て看板が目に入った。

女1 演劇なんて見たことなかったから、
死ぬ前に一度くらい。

男1 重いよ、重たすぎるよ。ポテト片手
にする話じゃないよ。朝からマクドナル
ドで聞く話じゃないよ。

女1 そしたら先輩が、舞台で何かやって
て。

男1 何かって何だよ。ああいうの一人芝
居っていうんだよ。大変なんだよ、ああ
いうの。

女1 私感動したんです。

男1 あ、うん。

女1 もう少し生きてみようって思えた
んです。

男1 あ、うん。それで、わざわざ部員俺
しかない演劇部のもぐりになろうつ
て思ってくれた訳ね。

女1 先輩絶対一番有名な役者さんにな
れます。

男1 いや、俺だつてそのつもりよ。10
年後20年後のために、この3年間で大
抵の有名な役の台詞は頭入れちゃって
るのよ。君もさ、もぐってまで来てくれ
るならさ、もうちょつと勉強しようよ。
南高の演劇部の門たたいて3カ月は経
ったでしょ。

男1、テーブルに置かれたポテトを食べる。

女1 先輩私。

男1 熱っ！言えよ。

女1 え。

男1 こんな熱いなら、さっき食べた時にさ、お前言えよ、俺に。熱いつて。ベロ火傷したらさ、役者はダメな訳。わかる？活舌、活舌。あめんぼあかいなあいうえお。はきはき言えないとさ、ダメだろ。

女1 先輩猫舌だから。

男1 猫舌？なんだそれ。

女1 もういいです。はい。アンケート。

A4サイズの封筒を手渡す。

男1 アンケート？なんだこれ。

女1 先週の夏定期公演「現代版 八百屋お七」のアンケート、今日持ってこいつて言ったから持ってきたんじゃないですか。

男1 そうだっけ。

女1 ほんと先輩は、台詞覚えはいいけど、他のことは何だっけすぐ忘れるんだか

ら。

男1 そうか、そうだと沢村先生に見せないといけないんだった。

女1 沢村先生？

男1 演劇部の顧問だよ。

女1 部員一人でも顧問っているんですね。

男1 いるよ、バカ。部外者の君の出演だつて、どうせ誰も見に来ないからつて許してくれてる観音菩薩みたいなおじいちゃんだよ。

封筒から1枚のアンケートを取り出す。

男1 1枚！

女1 贅沢言わない。

男1 世知辛いな。

男1 は封筒からアンケートを取り出し、読み始める。女1うつむき。

女1 先輩私。

男1 何だ手厳しいな。

男1 アンケートを読む。

男1 「野暮を承知で言えば、そもそも八

百屋お七を二人だけでやる必然がない。

部員が二人だから二人芝居つていう発想が安直。主役の彼、一人力んで、大劇場のミュージカルとでも勘違いしているかのような声量。語尾の発音に難があり気持ち悪かった……これ誰のこと？

女1 主役だから、先輩のことです。

男1 クソつ。おらはもうダメだ。

そのアンケート用紙をくしゃくしゃに丸めてしまう。

女1 いや、私好きですよ。生きテエとか消えテエ、みたいに。子音を強調するようない方。舞台の時だけ。あれ好きなんです。「デ」が「テエ」、「デ」が「デエ」。つて。

男1 おらは笑われてるべ。

女1 ねえ、先輩、先輩、また。自分のこと、おらつて。

男1 そうか、また出ちやつたか。ちよつと高ぶるとね、つい津軽弁がね。標準語ペラペラになってクラスのみんなと馴染もうとしてるんだけどね。なかなかね。

男1、ポテト食べる。女1捨てられたアンケートを拾い見開き、アンケートの続

きを読む。

女1 「が、しかし、二人の熱演に感激した。彼には、お七が火をつけてまでして会いたくなる色気がありました。」

男1 え。

男1、アンケートを奪い。

男1 そうなのよ、色気が大事なのよ。

女1 すぐ機嫌直して、先輩赤ちゃんみたい。

男1 わかってるね、この人。「どうもねぎとかににくを食ったみたいで、これは臭そうで」こうコミカルにやると色気も出るのね。

女1 先輩姿勢。背中ピシッと。

男1 おっと、そうだそうだ。何何。

男1 アンケートの続きを読む。

男1 「あなたがたの演劇の夢を応援します。この先10年、20年、長い人生で、夢はいくつもの壁にぶち当たることでしょう。その壁を乗り越えられるかどうか。」

男1、またアンケートをぐちゃぐちゃにして投げ捨ててしまう。

男1 俺はこういう、夢に現実を突きつけて、青春を馬鹿にするような書き方が一番嫌いなんだ。

女1は男1を見つめている。

男1 なんだ。

女1はポケットからライターを出す。

女1 夢がぶち当たるいくつもの壁・・・

男1 君まさか、たばこを、高校一年生が。君は一体何者なんだ。どこから来て、何がしたくて、こんな演劇部に。

女1 八百屋お七で使った小道具です。

男1 小道具。

男1は女1のライターを手に取り、火を灯す。二人、炎を見つめる。

女1 吉三郎に会うために、お七が投げ入れた恋の火。

男1 え。

女1 炎が二人を繋いでる。

しばらく炎を見つめている。

女1 先輩私。

と！そこに大きな声で。

従業員の声 こら！店内は禁煙だ。

男1すぐにライターを消し。二人姿勢を正し。

男1／女1 はい。

男1 ブレヒト。

女1 へ。

男1 ブレヒトは？

女1 誰？

男1 アチョー。

女1 ぐへ。

男1 そんなんで女優がつとまるか。出直して来い。

女1 先輩私・・・制作がやりたいんです。

男1 え。

女1 私、先輩を立派な役者に見せる。先輩のこと芸能事務所とかにたくさん売り込んで、有名にしてみせる。それが私の恩返しだと思ってるんです。

男1 女優志望じゃないの。
女1 制作です。

男1 制作？

暗くなる。

ここは20年後の男1の部屋。ボロアパートの一室。6畳一間の雰囲気。テーブルはちゃぶ台に、椅子は座布団に変わっている。男1と男2。お茶をすすする男2。ちゃぶ台の上には、カットされたりんごが皿に並べられている。

男2 いい加減にしてよ。

男1 あ、はい。

男2 あんた今何歳だっけ。

男1 38です。

男2 俺からしたら、九つも年上の部下に言いたかない訳よ。

男1 申し訳ない。

男2、お茶飲む。

男1 いい味でしょ。

男2 わからんよ。お茶の味なんて。

男1 青森の黒石にね、黒石茶ってあってね、あ、私ね、青森の出なんです。須見司令補はどこ生まれですか。

男2 新潟の村上だ

男1 新潟の村上。偶然だな、ちょうど村上の話しようと思ってたんですよ。というのも司令補のお生まれになった村上が茶畑の北限なんです。でもその北限は、経済的な意味での北限らしいですね。実は本質的な北限はこの青森の黒石なんです。貴重なお茶なんです。青森物産展でまたま手に入ったんです。貧乏でね、近所のスーパー閉店前の半額シールが貼られるタイミングを待ち構えるような情けない買い物しかできませんけど、お茶だけはね、なんだか、贅沢しちゃうんですよ、お茶だけは。

男2 警備員としてやるべきことやってよ。

男1 あ、はい。

男2 あんたが持ち場離れちゃってる間に、肝心のあんたの持ち場で、不審者侵入しちゃってるのよ、今度という今度はマズイよ。

男1 はい。

男2 持ち場離れちゃダメでしょ。あんたが命ぜられた警備場所？

男1 アトランティック商事ビルの警備です。

男2 そのビルの？

男1 りんごでもどうですか。

ちゃぶ台に置かれたりんごを勧める。

男2 そんな気分じゃないよ。

男1 これはうまいですよ。

男2 いいって。

男1 陸奥っていいましてね。青森の高級りんごでしてね、貧乏ですから、毎朝朝刊に挟まってるスーパーのチラシ全部目を通して。こういうあるじゃないですか、分厚いチラシの束が。

男1 は新聞のチラシの束を見せる。

男1 キャベツはスーパーまるやすが安い、きゅうりはスーパーやすひこ、鶏肉はスーパーひこまる。

男2 同じような名前のスーパーばかりだな。

男1 そんなスーパーを転々と回るような情けない買い物しかできませんけど、りんごだけはね、りんごだけは贅沢しちゃうんですよ、やっぱり青森だからかな、りんごだけはね。

男2 だからいいって、そんな話は。

男1 いや、このね、陸奥はね。

男1 りんご食べる。

男1 甘味が上品なんですすよ。酸味も多少感じ取った口の中に、この苦くて甘くて深みのある黒石茶を流し込むとですね。

男1の言葉を遮り。

男2 おい、貧乏だったら、贅沢はお茶かりんごかどっちかにしろよ。当然だろ。高級りんご買うなら、お茶はおいしいお茶でいいんだよ、おいしいお茶で。正面入り口。あなたの持ち場はアトランティック商事ビルの正面入り口の外ね、外です、

男2、男1の髪の毛に触れる。

男1 え。

男2 ついてたから、ゴミ。で、今回はなんで持ち場離れちゃったの。

男1 よんどころない事情が。

男2 何。

男1 子どもの悲鳴がね。聞こえたもんですから。

男2 どこから。

男1 向かいの公園から。

男2 それで。

男1 公園に駆け込んで、トイレの壁の後ろで、黒ずくめのチンピラ風の男が、そうですね幼稚園年長程度の女の子の腕を引っ張って連れ去ろうとしていた、ピンときたんですよ、あ、これは誘拐だ。

男2 待った。

男1 え。

男2 そのまま、口開けたまま。いーして。いー。

男1 いー？

男2 そう、いーして。

男1 言われるがまま、前歯をさらけ出す。
男2 はりんごに刺さった爪楊枝で、男1の前歯の汚れを取り始める。

男2 OK。

男1 え。

男2 りんごの皮、気になったから。で、それで。

男1 あ、はあ。これは誘拐だ、父親じゃない、絶対に誘拐だと思った。全身黒づくめの男はどこにだっている。でもその男は肌は色白だから、その黒がひとときわ際立って見えて、なんか第六感って奴が働いたんですね。ピンときたんですよ。

男2 それで助けたのね。

男1 はい。一応、訓練は受けていますので、一通りの身のこなしは心得ています。

男2 でもお父さんだったんだよね。

男1 はい、女の子は最初私の登場に驚いて声も出なかったようですが、終盤はパパ、パパと叫んでおりました。

男2 何してんの。

男1 父親を誘拐犯だと思い込むなど、とんだ見当違いでした、大変申し訳なく思っています。

男2 そうじゃないのよ、俺が言いたいのはそのじゃないの、あんたこの仕事始めてどれくらいだつけ？

男1 ようやく1年というところです。

男2 じゃあまださ、最初の研修で聞いた話覚えてるよね。

男2は鞆から研修資料を取り出す。

男2 読んでみて。

男1 はあ。

男1は資料を手に取り、表紙を見て。

男1 新入社員、警備の心得。

男2 そんなとこ読んでどうすんだよ、6

ページだよ、6ページ。

男1 (資料をめくり) 犯人に近付きすぎるのは危険。必ず犯人を追い詰め、自分で捕まえようとする者がいる。そして、怪我をする。殺される。我々に武器はない。

男2 そう、基本でしょ、あなたの役割は公園から悲鳴が聞こえたら、警察に通報すれば良かったの。

男1 はい、でもそんな悠長なことを言っている

男1の言葉を遮り。

男2 確か半年前にもあったよね、駅の改札前の警備中に、ホームで様子のおかしい男見つけて改札飛び越えて、アクションスター気取って、それで女性助けて、でもそれは駅員の仕事でしょ、って。

男1 その時は痴漢から見事、女性を救い出せたと自負しております。

男2 でも、ただだけ正しいこととしてもさ、持ち場離れちゃダメ。あなたが玄関立つてなかったせいで、アトラニック商事のビルに、不審者侵入してるのよ。今回の一件の肝心要はここね。

男1 はあ。

男2 相当怒ってるよ、先方さん。

男1 食べませんか。(りんご)

男2 食べる訳ないでしょ。呑気なもんだよ。上司は明日、年上の部下の不祥事の責任取って、先方様に詫びに行くっていうのに。

男1 恐縮です。

男2 あのね、あんたの持ち場での一挙手一投足は監視カメラで全部見られてんの。

男1の携帯が鳴る。

男1 すみません、ちょっと。

男1電話に出る。

男1 もしもし、もしもし、もしもし、もしもし、もしもし・・・もしもし。

電話切れる。

男2 何の電話だ。

男1 いえ、別に。すみません。とにかく、今回の件はお詫び致します。

男2 あのね、今日こうして家までお邪魔したのはね。言い辛いんだけどね。こう

いうのは、言いたかないんだけどね。

タイマーの音が鳴る。

男1 すみません。

男2 うるさい家だな。

男1 風呂湧きました。汚い風呂ですけど入って帰れますか？

男2 入る訳ないでしょ、風呂なんて。あのさ、俺はさ、帰ったら綺麗な奥さんとかわいい子どもが二人待ってるの。あんたと違うの。あのね、警備員って仕事は命令による統制が取れないと成り立たない仕事なんです。私司令補ですよ。私の指示は守って下さい。

男1 ごもつとも。

男2 警備は何より予防です。犯人を逮捕することが仕事じゃない。犯罪が起こる前に食い止める。例えば。

男1 ごもつとも。

男2 明かりを消し。

男2 こんな風に部屋が暗ければ。

男2 明かりを灯し。

男2 明かりを灯しておく、ということが

我々の仕事な訳です。

男1 首ですか。

男2 でも君は。

また男2明かりを消し。

男2 部屋を暗いままにし、自分の力を過信している。警備員の仕事の大抵は単調で地味で忍耐がいるんです。痴漢だ誘拐だ、そんなことは素人が見たって、痴漢なんだよ、誘拐なんですよ。仰々しい芝居してる訳じゃないんですよ。あんた舞台俳優か、違うでしょ。我々警備員には君の髪の毛に付着した小さな埃、君の前歯と前歯の狭い狭い隙間に挟まったりんごの皮のカスこそを、見つけ出せる、集中力、洞察力が必要なんです。逆に言えば、そういうことに気付けないような観察眼と意識力しか持ち合わせていないのならば、あんたは警備員失格だ。覚悟しといて下さい。一週間自宅謹慎だ、わかったね。

男2は出て行く。暗い部屋に男1一人に俯き。

男2 はあ。一文無しじゃ、夢もへったく

れもねえや。

ポケットから、たばこライターを出す。やり切れない感じでたばこをくわえ、ライターの火を灯す。と、部屋に女1がいる。

女1 先輩、大丈夫？

男1 君か。

女1 どうしたの？

男1 うん。

女1 元氣ないじゃない。

男1 君はいつも僕がしんどくなつた時に限って、顔を出す奴だ。不思議な女だよ。

女1 先輩ずっとこの、フrintホイールのライター。

男1 ああ、なんだか、その方が好きでね。

女1 今どき珍しい。

男1 警備員の仕事、一週間自宅謹慎になった、きつと首だ。

女1 良かったわ。いいチャンスだわ。いっそ先輩の方から、辞めてやんなさいよ。先輩は先輩の力を、全て、役者、演じることに注ぐべきだわ。

女1りんごを食べて。

女1 うん、これ、おいしい。

男1 こんなボロアパートで。

女1 いいじゃない、私こういう変哲もないボロアパート好きよ。階段とか手すりとか全部錆びちゃってる、インターホンはもちろん壊れてて、玄関のドアも昭和って感じのドアノブ回すやつ。私のボロアパートよりいい味出してる。

男1 お前今どこに住んでんだ。

女1 先輩の知らない町。

男1 なんだそれ。

女1 私こういうボロアパート見ると住んでみたくなるのよね。

男1 じゃあ住んでみるよ、こんな暮らしでさえ、今の給料じゃ苦しいんだ。

女1 お金の心配はいらないわ。

男1 何を言う。お前だって何かのバイトで食い繋いでるだけだろ。

女1 お金と夢とどっちが大事？

男1 単純な話じゃない。

女1 夢でしょ、夢に決まってるじゃない。

女1、男1の身体の臭いを嗅ぐ。

男1 なんだ。

女1 貧乏の臭いがする。

男1 何？

女1 汗臭い。

男1 悪かったな。

女1 それでこそ先輩です。いい香りのシヤンプーとか洗剤とか買えないのよね。石鹸なのよね、なんでも。ましてや香水なんてもつてのほか。

男1 馬鹿にするな。

女1 褒めてるのよ、見直してるのよ、やっぱ先輩は夢の匂いにする。

男1 なんだそれ。

女1 臭ってみて。

男1 いいよ。

女1 さあ。

男1 なんだよ。

女1 は男1に近付き自分の髪の毛を触り。男1臭う。

女1 どんな香り？

男1 少し汗臭い。

女1 そうそれが夢の香りなの。リンスだつて使わない。私剛毛だから、パサパサ。硬い毛。これが夢の手触りというもの。先輩もつと、昔みたいに胸張つて。

男1 年に1、2回、名もない小劇団の客演やって、ギヤラなんて当然0の役者が

どの胸張れつて言うんだよ。司令補には頭下げて、仕事続けさせてもらうよ。

女1 ダメよ。

男1 今まで1年以上同じ仕事続いたことなかったけどさ、警備員の仕事はさ、行けそうなんだよ、続けられそうなんだ。

女1 先輩。なぜそんなこと言うの。先輩は、吉三郎なの。

男1 何年前の話してるんだ。

女1 先輩が舞台に立ったら、一瞬でその場の空気は変わる。声を発せば、締め付けられる。先輩絶対チエーホフやつて欲しい。かもめ。かもめのトレープレフ、絶対合う。私確信してるのよ。

男1 チエーホフなんて夢のまた夢だよ。

女1 そんな弱音吐けるのも今のうちよ。お腹空いてない？ポテト。

女1 はポテトを持っている。

男1 いいのか。

女1 一緒に食べよ。

男1 悪いな。

男1 ポテトを受け取り、二人食べる。

男1 うまい、うまい。

女1 すぐ機嫌直して、赤ちゃんみたい。

男1 冷めてて食いやすい。

女1 冷めたポテトつて、なんだかたまらない気持ちになるわ。

男1 なんだそれ。

女1 貧乏な学生カップルはね。

男1 何の話だよ。

女1 お金がないからポテトSを一つずつ注文するよりね、ポテトのMを一つだけ頼んで分け合い食べる訳。

男1 は食べている。

女1 好きな人と語らつて、笑い合つて、アツという間に時間が過ぎて、気が付いたら一日中いて、もう夕暮れで、テーブルの上のポテトのMは、こんな風に冷めていて。

男1 そりゃそうだ。

女1 それで、熱いうちに食べたなら良かったな、なんて言つて笑つて二人で食べる、冷めたポテトの味は、恋の味。

男1 CMみたいだな。なんかの。

男1、女1から封筒を受け取り、中身を見る。

女1 でしょ、私、プレゼンテーションの能力あるのよ。感謝して。

男1 なんだよ・・・ウソだろ。

女1 嘘なもんですか。

男1 書類審査だけで通ったの。

女1 見直した？私のこと。

男1 すごいよ、君は日本一の制作だ。

女1 アントン・チェーホフ「かもめ」。

男1 チェーホフ。

女1 新しい小劇場のこけら落とし公演。劇団令和天井敷敷。寺山修司が好きで令和に天井敷敷を蘇らせようとしてる。面白いと思わない？この劇団の演出はきつと大物になるわ。先輩のこと詳しく書き込んでやったわ。どれだけ素晴らしいかを。

男1 やるか、見えてきた、ソーリン家の廃園。広い並木道。庭の奥の湖。メドヴェージェンコがいる、マーシャがいる。女1 そして上手からソーリンと共に、トレープレフ演じる先輩が舞台に登場する。

男1 トレープレフ。
女1 当然じゃない。トレープレフ、勝ち取ってよね。想像するだけで、鳥肌が。ほら、いつもの基礎練習。

男1 お、そうだ。

女1 腹式呼吸意識。

男1 あめんぼあかいなあいうえお。

女1 あめんぼあかいなあいうえお。

男1 うきもにこえびもおよいでる。

女1 うきもにこえびもおよいでる。

男1 いつも思うんだけど、なんでお前もやるんだよ。

女1 やってあげてるんじゃないですか、一人じゃ寂しいだろうと思つて。

男1 そうか。かきのきくりのきかきくけこ。

女1 かきのきくりのきかきくけこ。

と、隣の部屋から壁を叩く音。

男の声 うるせー。バカ野郎！

二人は肩を寄せ合う。

男1 隣のおじさん。

女1 怖い人？

男1 会ったことない。

女1 何年ここ住んでるのよ。

男1 しー。稽古はいつからだ。

女1 一週間後。

男1 ・・・一週間後か。

女1 先輩の15回目の退職記念日よ。

男1 ああ。

暗くなる。

暗闇の中で、ぶつぶつと男1の声だけが聞こえる。徐々に明るくなる。男3が柱に寄り掛かって、男1を見ている。男1は台本を見ながら、台詞を喋っている。ちやぶ台の上には一つリンゴが置いてある。

男1 「海で死んだひとはみんなかもめに

なつてしまふのです。これはダミアの古いシャンソンの一節です。ダミアの好きだったぼくは、このレコードを大切に持っていました。このレコードのなかの水夫の恋の物語を教えてくれたのは船員酒場に入りにしている娼婦でした。少年時代、ぼくは港町にいたから、ダミアの歌の世界はそのままぼくの心のなかの物語の世界だったのです。」チェーホフのかもめじゃなかったのかよ。

男3 そうだよ、寺山修司の「かもめ」だよ。

男1 振り向く。

男1 え。いつから。

男3 もらうよ。

男1 あ、それは。

男3 冷えてないね。

男1 それは・・・陸奥です。それは陸奥です。

男3 何ぶつぶつ言ってるの。

男1 ぶつぶつじゃない、陸奥だ。青森の、高級りんごの陸奥だ。唯一奮発して買う、一週間に一度の楽しみなのに。

男3 りんごの一つや二つ、俺がいつでも買ってるさ。

男1 陸奥だ、それは陸奥だぞ。他のりんごとぜんぜん違うんだ。高いぞ。

男1の言葉を遮り。

男3 ちょっと待て。何か匂う。

男1 陸奥の香りだろ。

男3 そんなんじゃない。

男1も辺りの匂いを嗅ぐ。

男3 女の香りがする。

男1 女？陸奥ですよ、陸奥。

男3 むつむつうるさいな。これはりんごの香りの香水だ。女が付けるやつだ。俺

は今香水にはうるさいんだ。かもめの少女に香水をつけて舞台に立つてもらおうと考えていてね、日夜、グ、グググと胸にくる香水を探しているからね、この香りが、香水かそうでないか、くらいのことはわかるんだよ。

男1 女連れ込んだりしてません。

男3 どうだか、女と遊ぶ暇があったら台詞真剣に覚えて欲しいものだね。

男1 遊んだりしてません。僕は必死に少年を全うしようと日夜。

男3 じゃあ、やってみよう。

男1 え。

男3 第2場、少年が船上から少女が見えなくなるまで手を振っている。俺が少女の台詞やるから、手を振りながら少年の台詞。

男1 あ、はい。

男3 「じゃああたし待ってる、絵を描いて、お茶を沸かして、本を読んで、沖を眺めて。」どうぞ。

男1 「どこにも嫁になんか行くなよ。」

男1は手を振り。

男1 「来年のきみの誕生日は、きつとい

つしよにお祝いできるからね。」

男3 だめー。

男1 はい。

男3 ト書き何て書いてる？

男1 はい、えつと、少し荒っぽい口調にやさしさを込めて。

男3 そうしてよ。

男1 なかなか難しい。

男3 もう一回。

男1 はい。

男3 「じゃああたし待ってる、絵を描いて、お茶を沸かして、本を読んで、沖を眺めて。」はい。

男1 「どこにも嫁になんか行くなよ。」

男1は手を振り。

男1 「来年のきみの誕生日は。」

男3 違う。もう一回。もう台詞からいっ

て。

男1 はい。

男3 よーい、はい。

男1 「どこにも嫁になんか行くなよ。」

男1は手を振り。

男3 違う、もう一回。

男1 え。

男3 よーい、はい。

男1 「どこにも嫁になんか。」

男3 ぜんぜんダメ。ねえ、俺どこの誰だ
がわかってる？

男1 はい。

男3 言ってみろ。

男1 令和天井棧敷の寺山さんです。

男3 違う！令和天井棧敷（てんどんさじ
き）の寺岡だ。

男1 え。天井棧敷。

男3 何が悪い。

男1 いや、別に。

男3 あのさ、見えない。ぜんぜんかもめ
の世界観が見えないよ。君役者向いてな
いよ。辞めちまえ！

男1の携帯電話が鳴る。

男1 すみません。

男3 ほんと、辞めちまえ。

男1電話に出る。

男1 もしもし、もしもし、もしもし、も
もし、もしもし、どなたですか？何な
んです。

電話切れる。

男1 すみません、変なイタズラ電話で。

男3何かを見つける。床から何かをつま
み上げる。

男1 何です。

男3 君の髪の毛じゃないね。こんな長い、
こんな細い、柔らかい、茶色の髪の毛は、
君の髪の毛じゃないね。

男1 知りません。

男3 女だな。

男1 女は連れ込んでません。

男3 じゃあ、何なんだ。りんごの香水と
いい、この一本といい。別に構わない。
君がどんな女と現を抜かそうとも。私の
知ったこっちゃない。でもね。私は天井
棧敷の演出として責任がある。

男1 落ちてる髪の毛も掃除できていな
いような部屋だが、女連れ込んだるとは、
ひどか。

男3 ん？

男1 おらだって、がんばっちゃる。あず
ましい少年目指しとる。

男3 何？何言ってる。

男1 あ、また出てしまった。ちよつと高
ぶると、その津軽の。

男3 そんなことじゃ、本番はもつと緊張
して、興奮する、そろそろ立ち稽古が始
まる、こんな大事な時に、女のことばか
り考えているようだから少年の気持ち
もわからないだよ。少しはさ、少年の
帰還を待ち疲れて発狂し崖の上から飛
び降りてかもめになった少女の気持ち
に寄り添って見たらどうなんだ。それ
に前前、まだ台詞頭入ってないの？本
番まで1ヵ月。正直に言ってさ、君の語
尾さ、「て」とか「で」がさ、「てえ」「で
え」って変な癖あつてさ、気持ち悪いん
だよ。ね。わかる？自覚して。一週間で
台詞全部覚えて。一週間で入ってなかつ
たら、降板ね。降板。わかった？いい奴
がさ、若いイキのいい奴がさ、先月入団
したのよ。何年ぶりの新劇団員よ。彼
少年役に合うと思うんだよな。

男1・・・

男3 何か言えよ。

男1 あの、少し荒っぽい口調にやさしさ
を込めて、というのは、その。

男3 そんなもん知るか。

男3、部屋の明かりを消す。

男1 え、何ですか。

男3 暗くなるということとは、耳を澄ますということだ。集中してかもめの少年の気持ち巡らせる。気持ちちができてないから、船の上から手一つ振れないだ。一週間だからな。

男3 部屋を飛び出して行く。男1一人。

男1 昔は、南高演劇部のスターだったんだ。あんな若造に演劇の何がわかるって言うんだ。

男1 俯き。ポケットから、たばことライターを出す。やり切れない感じでたばこをくわえ、ライターの火を灯す。と、部屋に女1がいる。

女1 先輩、大丈夫？

男1 また、君か。

女1 元氣ないじゃない。

男1 うん。かもめじゃなかったんだ。

女1 え。

男1 チェーホフのかもめじゃなくて、寺山修司のかもめだったんだ。

女1 寺山のかもめ？

男1 は、女1に台本を見せる。

男1 天井じゃなくて天井なんだ。彼は寺山じゃない、寺岡だ。天井なんだ。

女1 天井じゃなくて天井？

男1 ぜんぜん違ったんだよ。

女1 ……ごめんなさい。

男1 君が悪いんじゃない、俺が役の気持ちに入り切れてない、それが悪いんだ。

女1 先輩が悪いんじゃないの、あの演出家がダメなの。気持ち、気持ちって。道理で天井じゃなくて天井だわ。寺山のことうぜんわかってないじゃない。寺山修司は素人が好きなのよ。俳優はただの「血の詰まった袋」にすぎないんだよ、なんて言ってるのよ。「書を捨てよ、町へ出よう」知ってる？

男1 いえ。(女1に圧倒される感じで)

女1 雑誌に詩を投稿していた高校生たちを集めて彼らに自作の詩を舞台で朗読させたのよ、少なくとも3分ぐらいだったら世界中の人がみんな名優になれるって考え方から生まれたの。寺山は気持ちちがどうだこうだ、言ったりしてないのよ。

男1 はあ。

女1 しつかりしてよ、先輩。ほら、背筋伸ばして。

男1 あ、うん。なんで君そんな詳しいの。

女1 勉強しろ勉強しろって、高校時代、何度も夏休みのマクドナルドで私を叱りつけたの先輩じゃない。

男1 そうだけど。

女1 先輩が悲しい気持ちだか、嬉しい気持ちだか、怒ってるのか泣きたいのか、そんなことは先輩見たってわかんないのよ。わかる？

男1 え。

女1 悲しんで。

男1 は。

女1 今、ここで、悲しい気持ちになってみて。

男1 試みる。

女1 ぜんぜんわかんないわよ。

男1 あ、うん。

女1 嬉しいって思ってみて。

男1 試みる。

女1 早く。

男1 ああ。

女1 ちゃんと嬉しい、って気持ちになつて。

男1 なれないよ。

男1、俯く。

女1 そう、それよ。

男1 え。

女1 そういうことなのよ。形にしないと、動きにしないと、だから今みたいに、首を下に向ける、って具体的に動けば、ちゃんとわかるのよ。気持ち。今悲しい。そうでしょ。

男1 でもなんか歌舞伎の偉い人。

男1 は女1から台本を奪い、そこに記されたメモを見て。

男1 何やら吉右衛門って人はさ、役者が本当に泣かずして、どうして観客を泣かせることが。

女1 6代目菊五郎は、肩を少し動かす背中を見せるだけでお客様を泣かせられないようにやダメだって言ったわ。

男1 ?

女1 ……役者に限った話じゃないんだからね。みんな、みんなそうなんだから。

男1 どういう意味だ。

女1 気持ちなんてわからないんだから。ぜんぜんわかんないんだから。

男1 一週間で台詞全部頭に叩き込まないと降板だって。

女1、男1から台本を奪う。

女1 これくらい台詞先輩なら大丈夫。覚えられる。

男1 例え覚えられたとしても、少し荒っぽい口調にやさしさを込めて、なんてわからない。

女1 そんなト書き指示はそもそも曖昧なのよ。この役を誰がやるか、どんな年齢のどんな容姿の役者がやるかでイメージなんて変わっちゃうんだから、こういうのはね、曖昧だから正確だっていうものもあるのよ。

男1 小難しい演技論は止めてくれ。やっぱり俺はさ、立てないのかな。一生立てないのかな。帝国劇場とか明治座とか。

女1 大丈夫、書類審査また2つ送っておいだからね。今度は大舞台よ。通ったらオーディションよ。先輩はまだ自分の魅力に自分で気付いていない。それがいいところ。

男1 わたしはロマンスなんて信じない、現実には決して甘いものではないのだ。老人はそうつぶやいた。それは真実だった。

女1 台詞？

男1 エンディングの台詞でさ、身につまされるんだ。この台詞言う度に。甘くないんだよな、人生。いつまで夢だ、夢だ言うて生きてんだって、言われてる気がしてさ。

女1 台本を見て。

女1 でも、その後に、「だが、老人はまだ、心の奥深くあの夜の少女を愛していたのである」と続くじゃない。現実には甘くない、それが真実だけど、心の奥深くでは、夢見ていたのよ。この老人も。はい、いつもの、いつもの。

男1 ……うん。あめんぼあかいなあいうえお。

すぐに、壁を叩く音。

男の声 こらー、うるせえんだよ。

男1 またか。

男1ため息。と男1の携帯の着信音が鳴る。男1は電話に出る。

男1 もしもし。いつも何なんだ。君は誰なんだ。おい、黙ってないで、何か言ったらどうなんだ。今どき無言電話なんて流行らないよ。おい、何とか言え。なんでもいい。公衆電話からかけて来るんだ。おい、もしもし。もしもし。

電話切れる。

男1 間違え電話じゃなくてイタズラ電話なんだ。公衆電話からの。

気が付けば女1はいなくなっている。

男1 あれ。

暗くなる。

明るくなると、男1が一人、台詞の練習をしている。

男1 いや、待てよ。「海で死んでひとはみんなかもめになってしまうのです。これはダミアの古いシャンソンの一節です。ダミアの好きだったばくは、このレ

コードを大切に持っていました。」ここまで一息でいく方がいいな。そうだ。「海で死んでひとはみんなかもめになってしまうのです。これはダミアの古いシャンソンの一節です。ダミアの好きだったばくは、このレコードを大切に持っていました。」

タイマーなる。「ピピピピ」。男1タイマーを止めて。

男1 風呂風呂。

男1風呂場に向かおうとするが。暗くなる。

明るくなると、男1何やら封筒を開けている。中から半分に折り畳まれた紙を出す。

男1 舞台「美少女戦士セーラームーン」書類審査結果。サーカスの象使い・・・不合格。

男1もう一つの封筒も開封する。

男1 ミュージカル「ムーンライトピクニック」。占い師の男・・・不合格。

悩ましい男1。朝刊に挟まったチラシの束を見始める。

男1・・・レタスはまるやす、白菜はやすひこ、豚肉はひこまる。

暗くなる。

照明薄暗く灯る。部屋は暗いが、窓から差し込む月明りが、かろうじて、男1を灯す程度。男1は台詞を覚えようとしている。台詞をぶつぶつ言っでは、口ごもり、台本を見て、また台詞、止まる、台本見る。台詞。まだ台詞を覚えられない。

男1 「ほこりまみれの書斎。若いころ船出した、船の模型などを置いてあるテール、帆布、片隅のポータブル蓄音機はかすれた声で、古いシャンソンを歌っていた。海で死んだひとは、みんなかもめになってしまうのです。」ぜんぜん覚えられない。ダメだ。

男の声 うるせーいいかげんにしてくれ。

男1 発声練習してる訳じゃないべ！

男1はちやぶ台に突っ伏し、眠ってしまった

う。飛び起きる。目をこすり、ライターで火を灯し、煙草を吸おうとする。しかし。ライターの火が付かない。何度もやっても。火が付かない。男1諦め、また台詞を。しかし。また眠りに落ちてしまう男1を深い眠りに沈めるように、微かな照明も落ちる。

照明灯ると、女2と男1がちやぶ台越しに向かい合って座っている。男1お茶を入れてる。

女2 ニュースペーパーなんて今どき珍しい。

男1 まさか来てくれるなんて。

女2 だって、前カフエテリアで、住所教えてくれたじゃないですか。

男1 そうだけど。

女2 私ニュースペーパー読んでる人好きです。

男1 黙ってお茶を入れている。

女2 来ちゃまずかったですか、

男1 いや、そんなことないさ。何か相談でもあるのか。まだ落ち込んでるのか。痴漢なんか気にするな。前純喫茶でも話したが、駅の警備なんてしてたら痴漢な

んて珍しいことじゃないんだ、君が特別不幸な体験をしたと思わなくていい。君はむしろ魅力的だったんだ、それくらい前向きに考えておく方が、下を向くよりはいいはずだ。

女2 好きです。

男1 そんなに新聞読む人がいいのか。

女2 あなたが、好きです。

男1 ……

女2 照れてるんですか。

男1 え、いや。

女2 かわいい。

男1 君は前の純喫茶でも、からかうみたいで、私のこと好きだ、かわいいだ、言うけれど、私はもういいおじさんだ、君はまだアメリカのハーフで二十歳そこそこの学生で。

女2 大好きです。

男1 え、あ、え、いや。

女2 そういうところ。

男1 え、あ。君はアメリカのハーフで。

女2 見た目は、150%日本人。

男1 だから余計にぞくぞく。

女2 ドギマギしてる。

男1 君の良いところは、そのように、直球で、野茂みたいなトルネードの150キロのストレートで、気持ちを人に、つ

まり私に、伝えられるところだ。

女2 かわいい。

女2、男1の手を握る。

男1 が、が。

女2 野茂って誰？私のこと助けてくれた警備員の宏さんの手、自分の持ち場離れてでも、私の腕を引っ張って、ステーションのホームで痴漢から私を引き離してくれた、宏さんの手、プルプル震えてた。

男1 いや、それは。

女2 それが良かったんです。この人は私を痴漢から助けるために、自分の限界を超えようとしてるって、思った。

男1 手先が震えているのは、姿勢が悪くて、肩の筋肉が血管を圧迫して手先が震えている、それだけだ。

女2 謙遜。

男1 こんな手で君は満足なのか。

女2 はい。

男1、女2を抱きしめる。

女2 宏さん。

男1、接吻しようと、唇を・・・

女2 やめて下さい。

男1 はい。

男1 離れる。

女2 そういふのは嫌いです。

男1 そうだな、そうだ。野茂つてさ、フオークが一級品でさ、メジャーでも活躍したんだ。元は近鉄のエースでね。

女2 近鉄？

男1 あ、もう近鉄なんかないもんな。あ、そうだ、新聞やめようかな、って。はい。

男1は女2にお茶を差し出す。

男1 今はさ、警備の仕事終わって、疲れて帰ったらバタンキュウ、新聞なんて読む暇なくて、挟まってるスーパのチラシに目通すくらいな訳よ。

男1はお茶を啜りながら喋る。

男1 朝刊が玄関のポストに差し込まれるあの、なんだろ薄い新聞紙の束が配達のおっちゃんの手の力で押し込まれた

時の鉄のドアと紙の擦れる音って言うのかな、独特で、あれで何だか一回いつも目が覚めちゃうのね、それで、あ、今日も地球は回ってるって大袈裟だけ、ほんと何か変に安心してまた目覚ましが鳴るまで眠るんだけど。でも、もういいかなって。高いしき新聞さ。黒石ね。それ。青森の。茶畑の北限は新潟の村上なんだ、でもそれは経済的な。

女2 うるさい。

男1 え。

女2 ズーザーズーザー。お茶飲む時。カフェテリアでアメリカン飲む時も。

男1・・・猫舌なんだ。そう、診断されたんだ。内科の立派な先生に。たこ焼きとかシユウマイとか豚まんとか小籠包とか食べられないんですって言ったら、それは猫舌だ、って診断されたんだ、だからズーザー言わせないと飲めないんだ。

男1お茶をすする。

女2 また。

男1 だから。

女2 また、ほら。カフェテリアの時も。

男1 だから俺は猫舌だから。

女2 猫背。

男1 あ。

女2 猫背になってますよ。

男1・・・俺は猫背なんだ。そう診断されたんだ。前に接骨院の先生に、その先生はね、学生柔道で何回も優勝した経験のあるすごい先生でね、その先生がね、僕を見た途端に、指一本僕に触れることもせず、すぐに、君は猫背だね、って診断してきたんだ。

女2は髪をかき上げる。

男1 また。まただ。

女2 え。

男1 髪の毛。前の純喫茶の時も。

女2 あ、ごめんなさい。

ちやぶ台に落ちた髪の毛を拾う。

女2 猫っ毛なんです。

男1 一本一本細いのわかるから、絡まりやすいし抜けやすいなら、髪をかき上げなければいいじゃないか。

女2 診断されたんです。

男1 ！

女2 ビューティサロンで、ファッショナ

ブルなビューティーアーティストが、ミールのヘアーにワントタイム、ほんとにワントタイムだけタッチしただけで、フット、ユ―は猫っ毛ですね、つて診断されたんです。

男1 君ほんと単純な英単語しか発しないハーフだよ。

女2 はまた髪をかき上げる。

男1 だから。

女2 いい香りがしませんか。こうすると上品な大人の女性の、香りがしませんか。

男1 え、ああ。

女2 一日で消えてしまう言葉が、一生の支えになる、ということはあるんじゃないですか。

男1 え。

女2 ニュースペーパーですよ。

男1 ああ。

女2 私、毎朝、未明に朝刊が届く食卓つて嫌いじゃありません。何だか文学的で、聡明で、博学で。

男1 君絶対日本語だけで喋った方がいいよ。

女2 結婚して下さい。

男1 黙っている。

女2 宏さん、猫舌も猫背も病名だと勘違いしちゃうような頼りない宏さん、私が側にいてあげたい。熱いお茶汚らしく飲む宏さんの横で私は座ってあげてたい。で、嗜めてあげて、ああとか言う宏さんの手を握ってあげるの。自分を超えようと震える手を優しく包む。朝刊はこれからも頼みましょ、ね、そうしましょ。マネーなら私だって。ほら。

そうやって女2は、財布を鞆から出す。しかしそれは小銭入れ。中身をちゃぶ台にぶちまける。100円玉ばかり。

女2 情けないけど、でもこんな100円玉だって100枚貯めれた10000円、10000円を10000個集めれば、1000万円、ニュースペーパーの一つや二つ、へっちゃらよ。

男1 でもまだ二人は。

女2 付き合ってる。

男1 そうだ、

女2 警備員のあなたと私が出会ってまだ2カ月そこそこしか経ってないじゃないか。

男1 そうだ、そうだ。それに今日までに二人が顔を合わせたのは、先月、偶然駅で君が僕に声をかけてくれて、それで立ち寄った純喫茶で何気ない話を交わし合ったそれだけじゃないか。

女2 そのランデブーで私確信したんです。この人だって。1年や2年付き合わないと結婚の決心ができない男女の方がまともじゃないと思います。

男1 そう言われたら、それもそうだと思うて来るけど。それに僕はまだ、仕事だって警備員の契約社員で、だから誰かを養えるだけの安定した収入なんかないんだ。

女2 私、あのカフェテリアでバイト始めたんです。宏さんとの思い出のカフェテリアで、働き始めたんです。

男1 あれはカフェテリアじゃない、純喫茶だ。それに、それにだ、私はその、肝心の警備員の仕事だって持ち場をよく離れる、何かと誰かを助けたりして、君のせいで、と言ってる訳じゃない、毛頭ない、でもそれで僕はもうすぐ首になるんだ。

女2 だから私の収入があります。マネーが心配で、ライフの一步を踏み出さないと嫌いです。見て下さい、この10

円玉たちだって、ほら見てあげて下さい、この子たち。

男1、その10円玉を手に取り、10円玉を見つめている。

女2 こんな10円玉だって100枚貯めれた1000円、1000円を1000個集めれば、100万円にだって化ける。

男1 君。

女2 朝刊と共に目覚め、二度寝しちゃうあなたの唇にそっとキスをする。朝食は味噌汁、トースト、沢庵、スクランブルエッグ、納豆、スコーン。

男1 スコーン。

女2 あなたが警備のジョブに行った後、私は食器洗い、洗濯物、掃除機を終わらせて、カフェテリアの。

男1 純喫茶。

女2 純喫茶のアルバイトに行く。

男1 なぜこんなに10円玉ばかりなんだ。

女2 え。

男1 5円も1円もない、10円玉ばかり。

女2 この子たち、かわいいじゃないですか。

男1 お金を、あたかも自分の子どものように擬人化して呼ぶのは止めなさい。

女2 ……

男1 小銭入れに10円玉をこんなに蓄えておく人は、大昔の人だよ、携帯電話なんかまだ想像もできなかった時代の人たちがやることだよ。

女2 何の話です。

男1 公衆電話だよ。10円玉入れて、電話BOXに入り、コイン挿入口に10円玉を転がして、電話番号をはじき、受話器を取って、みんな誰かに電話をかけたんだ。君だったんだね。君がいつも公衆電話から、僕に、無言電話をかけていたんだね。

女2 ……聞きたかったんです。宏さんの声を、聞くと安心できたんです。

男1 名乗れば良かったじゃないか。

女2 小心者なんです。嫌がつていやしいか、嫌われていやしいか、そんな恐怖心が先だって、あの日カフェテリアで。

男1 純喫茶だ。純喫茶だ。

女2 純喫茶で教えてもらったテレフォンナンバーにテレフォンなんてとてもじゃないけどできませんでした。でもあなたの舞台俳優みたいにキラッとして声はどうしても聞きたくて、公衆テレ

フォンからの無言テレフォンを思っていたんです。そしたらあなたの「もしもし」「どなたですか」だけでも聞けるんじゃないかって。閃いたんです。

男1 そんな君が、今日はやけに大胆じゃないか。

女2 頑張ったんです。頑張ったから、こんなことできたんです。ミーもチェンジしないといけない。ネーム外人のくせしてフェイスはジャパニーズじゃないかって、いじめられて、フレンドなんかいなくて、反論もできずクラスルームのチェアにワンピーポー、シットしたジュニアハイスクールの

男1 だから馬鹿みたいだから変な英語はやめなさい。

女2 ……はい。反論もできず教室の椅子に一人座っていた中学生の私。痴漢にあっても声も出せない私、そんなんじゃないかって。宏さんみたいに、どうしたんです？（男1は女2が喋っている途中から、何か臭いを嗅いでいる。警備の持ち場を離れてでも、困っている人を助けて出してあげられるような大胆なライフを歩みたいって、何なんです？（男1に）

男1 思い出した。

女2 え。

男1 りんごの香水。君はまさか。

女2 気付いてくれたんですね。

女2 は鞆から香水の瓶を出す。

男1 勝手に、僕の家に入り込んでいたのか。

女2 ごめんなさい。無言訪問、してました。

男1 そんなそれは、そんなことしたら、それこそ不法侵入じゃないか。

女2 そんな。私はマーキングしただけなんです。

男1 猫みたいない言い方やめろ。まさか君。女2 違います、この部屋におしっこした訳じゃありません。

男1 当然だ。

女2 このアメリカンアップルノートの香水を振った手の甲を、すりすり、このすり切れた座布団にすりすり、こすり付けて。

男1 僕がりんご好きだから、香水も。

女1 りんごの香水は、ベイビーの夜泣きを軽減できるんです。

男1 赤ちゃん？

女1 宏さんってベイビーみたいなところあるから、僕がりんごの香りを身にま

とえば、宏さん毎晩、安眠できるんじゃないかと思ったんです。

男1 また僕は鍵をかけ忘れていたのか。君の言う通り僕は仕方のない赤ちゃんだ。

女2 あなたが帰ってくるまでに、そそくさと出て行って。

男1 間違いない、この香りが、数日前この座布団から。

男1 は女2 に近付いて身体の臭いを嗅ぐ。と、そこへ。男2 が登場する。

男2 おい、鍵開いてたぞ。

男1 須見司令補。

男2 お、取り込み中か。

男1 いや、そんなんじゃないやしません。

女2 汚い所ですけど、どうぞ。

女2 はちゃぶ台の上の10円玉を小銭入れに直す。

男1 君が言うなよ。

女2 夫がいつもお世話になっております。

男1 おい、やめろ。

女2 津田エリザベスです。

男2 ハーフですか。

男1 名乗らなくていいんだよ。

女2 見た目は純和風ですけど。

男2 こんな若い、美人な奥さんがいたとは。

男1 須見司令補。

女2 今お茶入れますので。

男2 いやほんとお気遣いなく。

男1 俺がやるよ。

女2 あなたはジョブのお話が。

男1 君は今日来たばかり

女2、男1の言葉遮り。

女2 お茶入れるのは私の仕事です、さ。

男2 いや、こうして夫婦の微笑ましいやり取りを見せられると羨ましい。

男1 須見司令補だって、奥様に二人のお子さんが。

男2 いや、子どもが二人もいるとね、もうね、こんなね。瑞々しい夫婦のやり取りなんてないのよ。お茶の準備をお互い

気遣い合い、自らがやると自己主張するなんてね。

男1 いや、彼女はね、須見司令補が思っているような関係の。

男2 今日来たのはね。

男1 あ、はい。わかっております。わか
っております。

女2、男2にお茶を差し出す。

女2 粗茶ですが。

男2 どうも。

男1 黒石茶だ。粗茶じゃない。

女2 私、納得いきません。

男1 何だ疑うのか、これはまごうことな
き黒石の。

女2 なぜ宏さんが首を切られないとい
けないんですか。

男1 やめろ。

女2 宏さんが、持ち場を離れたことは悪
かったかもしれませんが、でもその勇気あ
る行動で救われたのは、この私なんです。
改札を飛び越えてホームまで走り、私の
腕を握り、痴漢から私を引き離してくれ
た。

男2 あなただったのか。

男1 やめろと言ってるんだ。

女2 宏さんのような、勇敢な中年が、あ
なたがたの会社には必要じゃないんで
すか。

男1 申し訳ない、須見司令補。お前は何

もわかってないんだ、警備の何たるかも
知らずに。

男2 いや、いいんだ。

男1 須見司令補、私は須見司令補が仰つ
た通り、警備には向いていません。

男2 今日、僕が、わざわざ家まで押し寄
せてきたのはね、首を伝えるなら、事務
所まで来てもらいますよ、でもこうして
一日でも早く伝えなくちゃならんと思
ったのはね。エリア長がね。君の仕事ぶ
りを高く評価して下さっている。

男1 エリア長が。

男2 1年間無遅刻無欠勤、そして、君の、
持ち場を離れてでも、困った人がいれば、
奥さんのように、困った人がいたなら、
ルールを無視してでも持ち場を離れて、
人助けに奔走するような君の誠実な姿
勢、生き方を是非、社員に教えたいと思
ってらっしゃる。エリア長は正社員とし
て君を推薦したいと仰っている。

男1 え。

女2 正社員。

男2 それを伝えに来たんだ。

女2 あなた、良かったわ。

男1 それは本当ですか。

男2 嘘なもんか。

男1 突然で、そんな。

男2 躊躇う必要があるか。

女2 そうよ、あなた。

と、そこへ男3がやって来る。

男3 おい、鍵開いてたぞ。

男1 なんだ、次は誰だ。

男3 俺だ、俺。

男1 寺岡さん。

男3 取り込み中か。

男1 いや、まあ。

男2 人徳のある男の周りには、人が集ま
るんだ。どうぞ、私は伝えるべきことは
伝え終えました。さ、どうぞ。

男3 失礼。

女2 お友だち？（男1に）

男1 友だちだなんて。

女2 お茶入れます。

男1 おい。勝手にやるな。

男3 獲ったんだよ。賞、獲れたんだ。

男1 賞ですか。

男3 ああ、若手演出家コンクールの最優
秀だ。

男3は賞状を男1に渡す。

男1 最優秀ですか。

男3 おめでとくらい言ったらどうだ。
男1 はい。

男1は賞状をずっと見ている。

女2 演出家って、演劇か何かの？

男1 来月、この方が演出する舞台に出るはずだったんだ。でも俺は。

男1の言葉を遮るように。

女2 粗茶ですが。

男1 だから粗茶じゃない。

男3 いや、お構いなく、粗茶で結構。

男1 すごいじゃないですが、最優秀だって。

男3 違う、そんなことじゃない、賞がどうだという話をするために息せき切って来た訳じゃないんだ。見えたんだよ。

男2 すみません。

男2が男3の肩のゴミを払う。

男3 何です。

男2 ちよつと埃が。

男3 ああ。見えたんだ。車窓の遠くに高層ビル群がくつきり姿を現した時みた

いにね。

男1 はい。

男3 今日はその若手演出家コンクールの授賞式だった。そうだ、これは、俺が密かに書き貯めている自叙伝なんですよ。お恥ずかしいものですが、良ければ見てやって下さい。絶対有名になって、自叙伝を出版できるような演出家になるって決めてるんですよ。

男3は女2、男2に、簡素な製本の自叙伝を渡す。

男3 俺は壇上に立ち、喜びのスピーチを求められたので、この勝手に書いた自叙伝の暗澹たる私の生い立ちを簡潔に話したんだ。今まで人生25年間、陽の目を浴びたことなんて一度だってなかった。鹿児島の大隅半島なんて田舎から東京という大都会に出て来て、しがない大学の経済学部に通い始めても、コンビニバイトやっても方言混じりで人見知りの田舎者に友だちなんて一人もできなくてさ、4年間ずっと孤独で、でもなんとか、演劇ワークショップで出会った奴らと劇団を立ち上げるまでいった、でも鳴かず飛ばずで、何度諦めようと、何度

鹿児島に帰ろうと思ったことか。

男2 ちよつと目つぶって。

男3 え。

男2 右目つぶって下さい。

男3 右目？

男2 早く。

男3 何。

男3 右目をつぶる。男2、男3の目頭付近を爪先で払う。

男2 まつ毛、抜けてましたよ。気になってしまつて。

男3 ああ、どうも。で、何だっけ。

女2 この部分面白いですわ。

男3 どこです。

女2 「寺山修司に興味を持ったのは、彼が生まれた青森にある下北半島と、俺の鹿児島の大隅半島が似ていたからだ。地形も似ているし、相対した半島が二つあって、片方は進んだ地方、片方が遅れた地方とされて、遅れた半島から近いところに三陸海岸があつて、一方は日南海岸、湾の中には桜島と夏泊半島がある。」

男3 そうなんです。劇団名は寺山修司からあやかつて天井桟敷にした。ほんとそれだけのことなんですけど、寺山の演劇

論なんかちつとも知らない素人で。下北沢で歯食いしばって夢見て来たんです。

男2 左目をつぶって下さい。

男3 なんだあんたは。

男1 須見司令補。私の職場の上司なんです。

男2 気になるんです。さ、左目を。

男3 何だよ。

男3は左目をつぶり、男2は指先で拭き取るような動作。

男2 涙の痕のような。

男3 そうさ、泣いたんだよ、不覚にも泣いてしまったんだよ、スピーチの壇上で。

男2 わかります、わかりますよ。私がないぜ警備員なんて一日中同じ場所に立って、炎天下でも猛吹雪の日でも立ち続けるような仕事を、今生業として家族を養っているかと言うとね、あ、すみません。

男3 いいですよ、聞かせて下さい。

男2 すみません、出しゃばって、そうだからお恥ずかしいものなんです、今度社内報なるものに私の半生を記した記事を書けることになったんです。これなんです。よければ見てやって下さい。

男2は、女2と男3に、社内報を一枚ずつ手渡す。

女2 へえ、社内報なんて面白い。

男2 入社2年目にあたった、築10年大規模修繕工事のマンション警備の仕事が転職だったんです。その仕事は組まれた足場から住民を守るために、ただ立っているだけの警備でして、私は半年間エントランスに立ち続けたんです。それからね、少しずつ住人が私に挨拶してくれるようになったんですよ。

女2 ここわかります。「なんだかやはり嬉しかったのは、幼稚園に登園する子どもがお母さんと手を繋ぎながら、行ってきます、と手を振ってくれたり、小学生がたがいまって微笑んでくれるようになったことでした。」

男2 そうなんです、嬉しくて、涙がこぼれそうになったんです。私。新潟の村上なんて田舎から上京して孤独にずっと誰とも喋らず立ち続ける警備を1年続けて、もう辞めようと思っていた、そんな時配備されたマンションの警備で、僕は初めて大都会の東京で人の優しさに触れたんです。だから泣いちゃう気持ちわかるんです。

女2 私もわかります。孤独なハートが、誰かに救われた時のうれしさ。腕をつかまれて、こっちに來いって。

男3 そうなんだよ、嬉しくてえんえん、泣いたんだよ。それで喋ろうと思ったら、なんだか気が動転して、昔の薩摩弁がどんどん出て来てしまつて、笑われて、あいがとさげもした、あ、これは、薩摩でありがとうって意味なんだけど、あいがとさげもした、賞金でスーツの一つでも買うがよ、とか言つて、でもその時にね、その壇上でね、俺は見えたんだよ、あんたが「かもめ」公演の場内整理をきびきびとこなしている姿が。

男1 場内整理。

男3 俺はあんたが、遅れ客誘導もてきぱきこなすイメージがはつきり見えたんだ。

男1 少年の台詞、夜も寝ずになんとか覚えしました。

男3 君と以前、この部屋で即興の稽古をつけた時、君は少し興奮気味に、津軽弁を喋ったことがあった。

男1 はい。

男3 俺が薩摩弁で笑われている壇上で、君の津軽弁を思い出してね、そうするとたちまち君のイメージが完成したんだ。

君は役者じゃない。場内整理だ。僕はね
演出と役者だけで芝居ができるとは思
っていない。スタッフも立派な創作メン
バーの一員だ。高ぶって津軽弁が混じっ
た必死の君で、お客様を誘導して欲しい
んだよ。

女2 いいじゃない、宏さん警備員なんだ
し、そんな役回りお手の物よ。

男2 彼はうちの会社でも、切れ者でね、
上司からの信頼、も厚いんですよ。

男3 さもありなんですよ。

男2 機智に富んだ、という表現がぴった
りな男でして。

男3 でしょうね。

男2 楽しみだ。

女2 ええ、ほんとに。

男3 先程から思っていたんですが、奥様、
なかなか魅力的な方だな。

女2 あら嫌ですわ。

男3 艶があつて、舞台映えますよ、奥
様は女優向きだ。

男2 私もそう思ってたんですよ。

女2 もう、お二人とも、口がお上手な方。
その気になってしましますわ。

男3 いやいや私は断じて、冗談や、まし
てや嘘は言わない真面目人間でしてね。
今回の舞台でね、一人まだ役者が決まっ

てないんですよ。酒場のバイト役で、台
詞は二つしかない。でもバーテンが打殺
したかもめを優しく抱きしめてやる重
要な役どころなんですよ。

男2 奥さんぴったりじゃないか。

男3 まさに奥さんみたいに、美しい女性
を探していたんです。

女2 まあ、そんな、でも私ちようどカフ
エテリアの、あ、純喫茶のアルバイト始
めたところでした、酒場のバイト役なら、
お役に立てるかもしれませんわ。

男3 決まった。明日から稽古だ。

女2 じゃあ、やってみようかしら。

男3 いや、これは渡りに舟つてやつだな。

男1 ……おい。

男2 いや、素晴らしい一日だな。正社員
雇用も決まって。

女2 結婚も決まって。

男3 奥さんの出演も決まって。

男1 ……待てよ。

女2 しがないボロアパートの一室です
けど、ここで新しい二人のライフが始ま
ると思うと、お世話になったお二人にた
だただ感謝しかありません。ありがと
うございました。本当に、本当に。
男2 まるで、今日で我々の関係性が終わ
るような言い方だな。

男3 今日がスタートじゃないですが。
女2ほんとに、私ったら。

3人笑う。

男1 ふざけるんじゃないよ。

男2 え？

男1 ……帰ってくれないか。

女2 宏さん。

男3 どうしたんだい。

男1 結婚はできない。

女2 さっき嬉しそうな口調で、「いいの
かな」って仰ったじゃないですか。

男1 とにかく、僕は結婚はできない。帰
りたまえ。

女2 宏さん。

男2 どうしたんだい、君。

男3 どうしたんだい、君。

男1 須見司令補、僕は正社員にはなれま
せん。

男2 何？

男1 僕は働いている暇はないんです。も
う僕は警備の仕事は首になる腹積もり
でいたんです。僕にはもともとと俳優
修業の時間が必要なんです。深夜のコン
ビニバイトでもして食いつなぐつもり
です。今までお世話になりました。エリ

ア長にもよろしくお伝えになって下さい。お帰り下さい。

男2 正気か、君は。エリア長は君の誠実な姿勢を評価して下さって。

男1 誠実がなんだって言うんです。誠を貫くから嘘もつくし、人殺しだってするんだ、誠実な生き方が、いつだって間違いの始まりじゃないんです。

女2 ちよつと疲れてるんだわ。そうだわ。お休みになった方が。

男2 よく考えた方がいい。

男1 そんな時間はないんです。

男3 君は一体、なぜそんな生き急ぐような言い方をするんだ。

男1 寺岡さん、僕は場内整理なんてお断りします。

男3 でも君、少年役の降板は決まったんだ、それは演出の私が判断したことだ。

男1 じゃあこの座組みから降ります。それにこの人(女2)は単純でバカみたいな和声英語だけが言葉に混じる癖があるから、役者なんてできないんだ。

女2 そんな言い方サッドだわ。

男1 そういふところだよ。僕は忙しいんです。ハムレットやリア王やロミオや。そういう立派な役を演じるための、準備や勉強や自主稽古やらで。

男3 君は無理だ。

男1 「俺の名を呼んでいるのは、俺の魂、あの人だ。夜の闇に聞く恋人の音色の、なんと白銀の鈴にも似た美しさだろう。心澄ますほどの耳に、それはまるで静かな楽の音の調べだ。」

男3 何だ、それ。

男1 ロミオとジュリエットですよ。何だそれ、とは何と不勉強な。高校演劇部の時からずっといつか自分が演じる時のために、台詞はたくさん覚えてたんですよ。だから僕には暇な時間なんてなかった、いつでもぼそぼそ言ってるんですよ、登校する時、休み時間、帰り道、口元がぼそぼそ動いていて、いつしかあいつは怖い奴だって噂になって、友だちなんてできっこない、でもいいんです、よかったんですよ、今に見てろ、いつか見てろ、って口元ぼそぼそやってたんだ。

男3 わかる、気持ちちはわかる、俺だって有名になって出版する時のために勝手に自叙伝書いてるんだからな。君の気持ちは痛いほどわかる。でも君、君はもう38歳だ、なぜ自分自身の実力にそんなにも無頓着で盲目なんだ。

男1 「君は自分の道を発見して、ちゃんと行く先を知っている。だが僕は相変わらず、妄想と幻影の混沌のなかをふらついて、一体それが誰に、なんのために必要なかわからずにいる。僕は信念が持てず、何が自分の使命かということも知らずにいるのだ。」

男2 何を言っている。

男1 チェーホフのかもめ、トレープレフですよ。正に今の僕にぴったりの台詞じゃないですか。

男3 君が一生演じることがない役だよ。

男1 「ゴドーだ、とうとうやってきた。ゴゴゴドーだよ。わたしたちは助かった。さあ迎えに行こう。さあ、ゴゴ、来いよ。また帰ってきたな。」

女2 宏さん。

男1 ベケットのゴドーだって、どんと来いだ。

男3 そんな台詞覚えてどうなるって言うんだ。

男1 おら、覚えてんだ。

男3 また津軽弁だ。

男1 おらを誰だと思ってるんだべ？ 高校時代、これでも少しは名優だ、名演だ、ってちやほやされたべ。

男2 それはもう昔の話なんだよ。

男1 うるさい。「ああ、思いきや。すべては紛うかたなく、果たされた。おお光

よ。おんみを目にするのも、もはやこれまで、生まれるべからざる人から生まれまじわるべからざる人とまじわり、殺すべからざる人を殺したと知れた、ひとりの男が」

男2 やめて宏さん。

男1 オイディプス王だって。

男3 無駄だ。

男1 覚えたんですよ、高校時代、誰か聞いて下さいよ、リア王だってできるんですよ。

3人は男1の迫力に圧倒されている。

男1 「皆疫病に取りつかれてしまうがいい。どいつもこいつも人殺しだ。謀反人だ。俺は娘を助ける事が出来たかもしれない、今となつてはもう二度と戻っては来ぬ。コーデイーリア、コーデイーリア、まだ行つてはならぬ。今暫く。はっお前なんか言つたな？これの声はいつも優しく柔らかく物静かで、如何にも女らしい佳い声であつたが、お前の首を締めた奴はこの俺が打殺してしまつたぞ。」

とそこへ壁をどんどん叩く音。

男の声 逃げろ！逃げろ！

「どんどんどんどん」壁を叩く音。

男2 え。

男3 なんだ。

女2 誰？

男1は、ずっと台詞を吐いている。男4が息せき切つて入つて来る。

男4 おい、何してんだ、火事だ、火事。

男2 火事。

女2 逃げましょ。

男3 君、君、君。（男1はその投げかけを無視したまま）

男4 お前、死んじまうぞ。

男1、黙る。

男3 形振り構わず夢追うためにはね、能力が必要だよ。君演技うまいの？それだけのことだよ。

男2 お金がない人生はみすばらしいものだよ、帰る家があつて、うまい飯があつて、温かい布団で明日を迎えることができる、そんな素朴な毎日ありがたい

ことだよ。いいかい、夢を追うことだけが、人生じゃない、そんなことはもういい歳した大人はみんなわかつてるんだよ。

女2 ラブがドリームをダメにするんじゃない、ドリームがラブを息苦しいものにしてしまふんだわ。私そう思うわ。

消防車のサイレン音が鳴り響く。

男4 早く。

男2、男3、女2去る。

男4 おい、1階でボヤだ。ここは2階なんだから、燃え広がったら死んじまうぞ。

と、そこへ、女1が入つて来る。

女1 先輩、大丈夫？

男1 全部断つてやつたんだ。

女1 全部つて？

男1 女がさ、結婚しようつて。

女1 ダメよ、結婚だなんて。

男1 ああ、君はそう言うと思つたからさ、だから、はつきりと断つてやつたんだ。
女1 それでこそ、先輩だわ。

男1 正社員も断った。

女1 すごい、すごいわ、先輩。

男4 お前ら聞いているのか、こら、お前だろ、お前が部屋に来て、一緒にあめんぼあかいな、なんだこうだ、叫び続けて、うるさくてうるさくて、何度怒鳴りつけてやったことか。

男1 かもめの出演も断った。だってそう
だろ、俺は、俺はさ、ロミオとかハムレットとか。

女1 そうね、そうね。

男1 でも俺はもう膨大な台詞が覚えられない。もう俺はどうすればいいのか、どう生きていけばいいのかわからなくなっただ。

女1 大丈夫。大丈夫よ。

男4 いい加減にしてくれ、って壁をこの壁を、どんだんどん、叩いて。怒鳴ってたんだよ。

女1 先輩は長く頑張り過ぎたの、休みましょ。休まなければいけないわ。

女1 はハンカチで男1の口元を拭いてやる。

男4 高校時代、俺は一度だけ演劇というものを見た、その二人の熱演に感動して、

俺はアンケートなるものまで書いた。今は毎晩一升瓶だけが友だちみたいな男だけど、お前らのうるさい声聞くと思いうすんだ、あの二人の熱演を。だからお前らみたいな奴ら、怒鳴りつけてやりたくなるんだ。ガンバレよ、負けんよ、ガンバレ、夢なら、食いしばって頑張れよって。

女1 私がついてるわ。

男1 うん。

男4 俺は先逃げるぞ。

男4 去る。

男1 君が火を放ったのか。

女1 そんな勇気私ない。

男1 君ならやりかねない。

女1 どうかしら。

男1 怖い女だ。逃げよう。

女1 もう少し。

男1 え。

女1 もう少し、ここで、一緒にいてもいい？

男1 ああ。

サイレン音、より大きく。女1、男1に寄り掛かる。

男1 発声練習しようか。

女1 もういいのよ。

男1 昨晚、また同じ夢を見た。超満員の大劇場でカーテンコールに応えてる。

女1 超満員の大劇場で、先輩は何を演じていたんです。

男1 それがうまく思い出せないんだよ。

女1 もう、思い出さなくていいの。

男1 そうか。

女1 夢はみる必要があつて人間における現象だとすれば、眠りからさめた瞬間に、夢を忘れてしまうのもまた、忘れる必要があるからに違いない。

と、男1は女1を抱きしめる。この部屋に炎が迫っている、そして一瞬にして暗くなる。

舞台は20年前に戻る。ちやぶ台はテーブルに戻り、そこにファーストフード店のポテトMが置かれている。セミの鳴き声が響く。男1は顔に開かれた台本を乗せて居眠り中。女1はポテトを食べている。

女1 アチョー。

女1、男1の脇腹をつつく。

男1 ぐへ。

男1 起きる。顔に乗せていた台本が床に落ちてしまう。女1は落ちた台本を拾おうとする。

女1 眠ってましたよ。

男1 うむ。今どこだ、ここは。

女1 いつものマクドナルドですよ。

女1 はぐちやぐちやに丸められたアンケートの存在に気が付く。

男1 超満員の大劇場でカーテンコールに応える夢を見た。

女1、ぐちやぐちやのアンケートを開く。

男1 気持ち良かったなあ。

女1 先輩、これ裏にも続きが書いてありますよ。

男1 ん？そのアンケート誰が書いてくれたの？

女1 知らない、名前がないんです。

男1 で、裏は何て？

女1 夢の壁を乗り越えようとする時、大切なことは、たった一人の相棒です。

二人は数秒間見つめ合う。

女1 超満員の大劇場で、先輩は何を演じていたんです。

男1 ハムレットだ。第三幕第一场クロード・ディアスとポローニアスはカーテンの影に隠れ、オフィーリアは膝まずき、沈鬱な表情でハムレット登場。

女1 いや、待ってました。

男1 「生きるか、死ぬか、それが問題なのだ。暴虐な運命の矢玉を心にじつと堪えるのと、海と寄せくるもろもろの困難に剣をとって立ち向い、抵抗してこれを終息させるのと、どちらが立派な態度か。」

女1 うん、いいと思います。

男1 いいか、夢は絶対あきらめないんだぞ。わかったか。

女1 はい、先輩。

男1 寝て起きて忘れるようじゃダメなんだぞ。

女1 ですよ、先輩。

二人、冷めたポテトのMを食べながら、

睦まじく、前を向いて語らっている。終わり。

(引用及び参考資料)

「かもめ」 寺山修司

「ロミオとジュリエット」「リア王」「ハムレット」 シェイクスピア

「かもめ」 チェーホフ

「ゴドーを待ちながら」 ベケット

「オイディプス王」 ソポクレス